

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 南 和男 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

今年度の共通テストについて、1の「はじめに」では追・再試験「日本史A」と「日本史B」の一般的な概略について、2の「試験問題の程度・設問数・配点・形式等」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べる。

1 はじめに

本試験では、昨年度の平均点がかなり低かったが、今年度は例年並みの平均点に戻り、適切な難易度であったと思われる。追・再試験については、受験者数が少ないこともあって毎年平均点が公表されていないため、過去の追・再試験や同年度の本試験と比較して難易度が妥当であったかを検証することが難しい。印象としては、やや細かい知識を求める問題も見られるものの、全体としては資料の読み取りは適切な難易度であった。平均点等の統計情報が公表され、正確なデータに基づく分析ができるようになることを期待する。

以下、それぞれの日本史の試験について検討した結果を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

日本史A

設問数は平成28年度から大問5題、小問32題となり、今年度も同様である。出題範囲は、幕末期の1850年代（欧米との貿易開始）以降の近・現代である。その下限は1990年代を含むが、設問としては1960年代後半（四大公害訴訟）までである。なお、「日本史B」との共通問題は、大問2題で34点分となり、昨年度と同様であった。

出題形式別では、正誤問題が8題（うち正文・適文選択5題、誤文・不適文選択3題）と全体の4分の1を占めた。また、正誤の組合せが5題（一昨年度8題、昨年度6題）、語句の組合せが5題（昨年度6題）、正文の組合せが4題（昨年度5題）にそれぞれ微減した。一方、人物・事項などの組合せが5題（昨年度1題）と増加した。その他、年代配列は昨年同様の5題、語句の選択はなくなった（昨年度1題）。32題のうち19題が組合せ問題であり、その種類とバランスもほぼ等分に調整された。

時代別では、幕末0題、明治11題、大正2題、昭和（戦前・戦中期）2題、戦後5題であった。昨年度と比べると、幕末のみの出題なしは同様で、明治で3題、大正で1題増加したが、昭和（戦前・戦中期）で3題、戦後で3題減少した。一方、複数の時代にわたる時代横断の問題は12題（昨年度9題）で、時代をまたぐ比較を求められる場面が増えた。

分野別では、複数の分野にまたがるものも含め、政治18題、社会・経済16題、軍事・外交12題、文化5題、混合問題14題であった。昨年度は政治10題、社会・経済16題、軍事・外交11題、文化7題、混合問題12題であった。政治が昨年度より8題増加した。学習の軸となる分野であることを考えれば、受験者にはやや取組みやすくなったとも言える。また混合問題は定着したものとみられ、出来事の順序に従って、あるいは各分野に絞って各大問に取組めた従来の出題とは異なり、受験者

が各分野をまたいで様々な知識を用い思考をめぐらせて解答することを求めるものであり、個々の事項としてだけでなく因果関係などで関連づけるよう指導することが重要になる。

史資料を活用した問題は、文献10題、地図・写真0題、図2題、グラフ2題、混合（文献・統計）1題と、昨年度の計8題から急増している。受験者が苦手とする文献への偏りが目立つため、種類ごとの均衡を保っていただくことを希望する。一方、従来知られていない視点を取り入れた問題にもみられるように、高等学校の授業など基礎的な学習を前提にした出題も意識されており、「歴史総合」で求められる諸資料の活用を問う傾向が鮮明になっている。

追・再試験は受験者が少なく平均点は公表されていないが、出題形式や史資料のバランスに変化がみられた一方、全体として平易な問題が多く、引き続き受験者には取り組みやすい試験であったと考えられる。

以下、詳細について述べていく。

第1問は「近現代の都市と水道の歴史」について授業の課題に取り組む高校生の会話がリード文になっており、2場面で構成されている。場面Aでは水道の始まりや植民地での水道整備、場面Bでは防火・産業での水道利用や下水道の整備について調べた事項をもとに、互いの感想や考察を述べ合う2人の会話を組み合わせて出題している。日ごろ高校生に関心を持たせにくい社会資本を題材に、場面A・Bの会話文や精選された引用資料を通して、近現代の都市にくらした人々と水道との関わりを概観できる、このような社会史的アプローチは、私たちが現在享受している生活基盤の成り立ちに目を向ける好機をもたらしてくれる。この点で、第3問「近代日本の重要人物」とのバランスが良い。しかし第1問を通して、教科書・資料集等の記述や高等学校の授業での取り上げ方に差異が生じる内容に関わる出題が散見された。大半の受験者が着実に学んだ結果を十分に出すことができたと振り返ることができる内容であるか、出題にあたっていっそう留意していただきたい。また、基礎知識の確認や平易な資料の読み取りがやや目立ったことから、知識や資料をもとに更なる思考・判断を求める出題とのバランスの調整も願います。問1は水道整備にまつわる語句の組合せを選ぶ問題である。アの「横浜」は易しい。植民地統治に携わった人物を選ぶイはやや難しいが、後藤新平は、台湾で民政長官を務めた点に加え、関東大震災後の帝都復興の中心人物として重要である。朝鮮総督を務めた齋藤実も歴代首相として必須の人物であろう。ただし、後藤と齋藤の植民地統治に携わる事績について教科書・資料集等の記述や高等学校の授業での扱いに差異が懸念される。本問の主題である植民地（ここでは台湾）の統治に関しては、より基本的な語句（台湾、樺山資紀など）や文を選ばせても良かったであろう。問2は明治時代の衛生と病気に関する文と語句の組合せを選ぶ問題である。新型コロナウイルス感染症の流行を意識した出題と思われ、伝染病・感染症に関わる歴史は今日的な関心とともに学ばせたい。Xは平易であり、Yは一般教養に属する事柄であるが、過去にも出題があった開国直後のコレラ大流行と同様に、教科書・資料集等や授業での扱いの状況に留意する必要がある。問3は史料（新聞記事）を読み解き、水道条例発布時の議論の内容と同時期の地方制度について正文の組合せを選ぶ問題である。aとb、cとdから一つずつを選んで組み合わせるこの形式も定着した。地方制度の整備については憲法制定などとともに詳述する教科書もあるが、受験者の関心・理解を高めにくい法制史への日ごろの学習が問われる出題である。ただし、山県有朋が市制・町村制など地方制度策定の中心人物であったとの知識があれば、史料1の読み取りとも合わせて容易に答えられる。問4は植民地時代の朝鮮の衛生・医療に関する当時の調査資料（表・解説文など）を読み解き、それらをまとめた論述の要旨に合う語句の組合せを選ぶ問題である。また、問5は史料（新聞記事）を読み解き、戦時下の京都の疎水への陸軍からの要望について正誤の組合せを選ぶ問題である。この2問は、植民地統治下の朝鮮や戦時下の京都における水道・水利と人々を取り巻く事情の一端を受験者に示し、関心を持たせる出題であった一

方、史資料の読み取りは容易で個々の学習状況を問わず答えやすかったと考えられる。問6は敗戦後の農村や農業の変化に関する年代配列問題である。Ⅰ～Ⅲの文はどれも時期を特定する用語・事項を含み、取り扱っている時期の範囲も適切で、平易な良問である。問7は大正時代から敗戦までの都市と生活に関する誤文選択問題であり、選択肢の内容はどれも基礎的事項で解答は容易である。

第2問は「日本史B」との共通問題で、パスポート（旅券）の歴史に関する博物館の展示解説をリード文とする。解説文Aは「日本初の旅券」、Bは「明治中期の旅券」に関する文章である。問1は江戸時代の人物に関する基本的な内容で易しい。問2はⅡの時期を特定するのが難しかったであろう。Ⅲの文章が明治十四年の政変につながる事件の文章であるため、日本郵船会社の設立（三菱と共同運輸会社の合併）の時期がそれよりも後であることがわかるかを問う意図であったと思われる。内容としては適切であるが、やや難しい。問3のXは日本史の知識がなくても判断できるが、Yは外交に関する史料から憲法に関する知識へと発展させており、史料から読み取れる情報が多岐にわたることを示す設問であった。問4はa・bが史料の意味を理解できなければ判断できない文章で、この設問も語句の拾い読みでは解答できないように工夫されている。

第3問は「近代日本の重要人物」についてクラス発表の準備をしている二人の発表メモをリード文に、メモAでは中江兆民、メモBでは原敬について調べた事項とその関連史料を交えて出題している。近代日本を主導した人物の事績に関連して、明治期の思想・言論や政治・社会運動、明治から昭和初期にかけての外交・政治の動向など多くの受験者が学習の中心とする分野の出題が並び、かつ標準的な内容が多く、取り組みやすかったと考えられる。問1は語句の組合せを選ぶ問題で、解答は容易である。問2は、自由民権運動に関する年代配列問題で、運動の流れを理解していれば迷わず答えられる平易な良問であるが、Ⅰ～Ⅲの文中で団体・運動の名称を直接的には示さないことで、解答に要する思考の幅がいっそう増えるであろう。問3は幸徳秋水の思想に関する正文選択問題である。幸徳及び明治前期の啓蒙思想家（福沢諭吉）の執筆文の読み取り内容と、幸徳に関する知識（社会主義者、日露戦争での非戦論など）を組み合わせる思考させる良問といえる。史料の難易度も適切で、選択肢の各文も工夫されており、こうした良質な問題が今後も出題されることを期待する。問4は天津条約に関する正文選択問題であり、当時の朝鮮問題への基礎理解があれば問題なく解答できる。問5は史料（『原敬日記』）に関して正誤の組合せを選ぶ問題であり、受験者には読み慣れない文体ながら読み取りは難しくない。また、日記史料を通して伊藤の山県評や原の伊藤評に触れることで、重要人物の考えや関係性への関心を高めるきっかけともなろう。問6は原敬内閣の政策について語句と文の組合せを選ぶ問題、問7は歴代の立憲政友会総裁に関する誤文選択問題で、原・高橋是清・田中義一の各内閣への総合的理解があれば容易に解答できる。

第4問「日本史B」との共通問題。日本の漁業と対外関係について述べたリード文で、Aは明治以降の漁場拡大と紛争について、Bは戦後の漁業について扱っている。問1は史料の内容に基づいたグラフの読み取り問題で、複数の種類の資料を活用した思考が求められる良問である。ただし、①と③は史料の内容に基づく文であるが、②と④は日本史の知識を問う文であり、正文の組合せ形式による出題も考えられる。問2は同時期に属する文化と社会に関する文を組み合わせる設問である。文化史を他分野と関連させることや、時期を意識した学習が求められている。問3は大正～昭和期の日米関係に関する年代配列問題で、Ⅱが意味するところを判断するのがやや難しかったと考えられる。しかし、Ⅰ～Ⅲはいずれも高校日本史では基本的な事項だと言える。問4はc・dが史料の内容に関する文で、他の史料問題と同様に、主語が何（誰）であるか、といったことを意識して意味を正確に把握しなければ判断できない良問である。問5はどちらの空欄も初歩的な事項であり、非常に易しい。少なくとも、正答の「中華民国」に対して誤った語句として「中華人民共和国」を挙げたり、正答の「佐藤栄作」に対して誤った語句として「田中角栄」を挙げたり、と

いった水準の出題は求めたいところである。問6は高度経済成長と公害に関する文の正誤判断で、Xは太平洋ベルト地帯を学習していれば判断は易しいが、やはり単純に用語を問うことを避けようとする出題姿勢を見て取ることができる。Yは公害の原因を問う文で、標準的な水準である。問7は魚介類の消費量と自給率に関するグラフについて、日本史の知識を背景に読み取る設問であった。いずれの選択肢も、歴史用語をできるだけ用いないようにしつつ、日本史学習の成果を引き出せるかを問うように工夫して作られている。また、③は円高・円安と貿易の関係を理解していることが求められる文で、歴史用語を単純に暗記しただけでは対応できない。④はインスタント食品の登場時期に関する文で、1990年代も教科書でしか知らない世代の受験者にとっては難しかったであろう。

第5問は「近現代日本の女性の社会的地位向上をめぐる動向」に興味をもって探究する高校生が作成したという設定の3枚のメモをもとに構成されている。明治期の家族や結婚、女性解放運動、市川房枝の活動と精選された関連史料を通して、明治から敗戦後における法制・政治や社会運動に関して出題するとともに、今日的な課題である女性の社会的地位をめぐる動向を概観できる内容となっている。その点では、探究学習などのテーマにしやすい近現代女性史も第1問と同様に、現代の私たちがもつ社会通念の成り立ちやその経緯に目を向ける好機ともなる。問1は明治期の家族や結婚をめぐる議論について語句の組合せを選ぶ問題であり、平易な内容である。問2は明治民法における家族と結婚について正誤の組合せを選ぶ問題である。Yは平易、Xは絶大な戸主権への理解に加え、史料にみえる「戸主の同意」と「父母の同意」の差異に気づけば、史料を読み取らせる出題としても正答に至るが、差異について注釈があっても良い。問3は明治期・大正期の社会主義や労働運動に関する年代配列問題である。片山潜にまつわるⅢ(1897年)とⅡ(1901年)の年代が近いが、この時期の運動の展開を理解できていれば解答できる。問4は大正期の新婦人協会の請願書について正文の組合せを選ぶ問題である。a・b・dの文がわかりやすく書かれており、cの異質さが目立つ。文の作成にあたっては均質になるような配慮をお願いする。問5は市川房枝の文章と大政翼賛会について不適当な文を選ぶ問題である。史料読み取りの①②と基礎的な知識・理解に関する③④で構成され、解答は容易である。このような選択肢の組合せをとる場合は、正文の組合せを選ばせる形式が妥当であろう。問6は敗戦後の女性の社会的地位に関連して文と語句の組合せを選ぶ問題で、平易である。問7は女性の地位向上をめぐる正文選択問題で、平易な良問である。

日本史 B

「日本史 B」について、設問数は大問6題、小問32題の構成で、今年度の本試験や昨年度の試験と同様であった。リード文としては、生徒の発表に関わる会話や発表要旨、メモなど、新教育課程で想定される生徒の学習活動を意識したものが多かった。また、昨年度の追・再試験では、統計データの読み取りがなく、大部分が史料読解であったため、本試験のように様々な種類の史資料を活用した作問をお願いしたが、今年度は史料だけでなく、表やグラフ、絵画など、多様な資料も活用されていた。

出題範囲は古代(飛鳥)から現代(戦後)までであった。本試験や昨年度の追・再試験では考古学分野の出題もあったが、今年度追・再試験は最も古い時代が、時代横断型の出題のなかの飛鳥時代であり、旧石器～古墳時代も含めた幅広い時代の出題をお願いする。

出題形式別では、正誤の組合せと年代配列が各6題、正文の組合せが5題、正誤問題(正文)、語句の組合せ、人物・事項の組合せが各4題、正誤問題(誤文)が2題、語句の選択が1題であった。昨年度と比べ、正誤問題(正文・誤文)が減る一方、組合せの問題が増加し、複数の内容を一つの設問で問われるため、得点し難かったかも知れない。また、各大問で年代配列が1題ずつ出題されていた点も特徴的であった。

時代別では、時代横断型の出題が昨年度よりもさらに増加し、15題と最も多かった。各時代単独の出題は、江戸が5題、明治、戦後が各3題、鎌倉が3題、奈良、平安、室町が各2題であった。旧石器～古墳時代は時代横断型でも出題がなく、また、昨年度に続き院政期の出題もなかった。江戸時代よりも前の時代のほとんどが時代横断型である点は昨年度と共通しているが、今年度は近現代においてもその傾向が強まっており、時代の特徴を理解して他の時代と区別する力が求められている。

分野別では、複数分野にまたがる混合問題が17題と半分以上であった。時代横断・分野横断の出題が多いのが今年度の特徴で、日本史の学習でどのような力を身につけてほしいと考えているかがよく示されている。混合問題も含めた分野ごとの出題数は、社会・経済と文化が16題と最も多く、政治が15題、軍事外交が13題であった。昨年度は、資料を活用した出題がしやすい社会・経済分野に偏っている問題を指摘したが、今年度はこの問題が解消されており、バランスの良い出題であった。特に文化史の分野について、ただ作品名などを暗記することだけを求めるような問題ではなく、しかもこれほど多く出題されていることに敬意を表する。

次に、各設問の詳細を見ていく。

第1問は、「肖像をテーマとする日本史の自由研究」に関するメモをリード文とする出題であった。問1は小村寿太郎・歌川広重の活躍した時代を問う問題。どちらも著名な人物であり、時期の特定、表の読み取りともに易しい。人物に関する事項の暗記ではなく、時代も意識した学習ができているかが最初の設問から問われた。問2は絵画の年代配列問題で、時期が大きく離れているので易しい。これも絵画の作者などの暗記ではなく、文化史の時代区分を把握できているか否かが問われた。問3はまずX・Yが誰のことを判断し、その上で日本への来航に関する地理的な知識を問う。人物の特定は容易であるが、ペリー来航に関する地図の判断は難しかったかも知れない。多くの教科書の本文中にはペリーの航路についての詳しい説明はなく、用語を暗記するような学習でも対応できないであろう。表面的な学習にとどまらず、資料を活用しながら、なぜ現代の感覚からすれば遠回りの航路で来航したのか、などの問題を設定し、探究するような学習が求められよう。こうした学習のあり方を示しているのが問4である。絵画に関する知識ではなく、疑問点が複数提示され、それをどのように調べていくかという探究の方法を問う設問で、昨年度にも出題が見られた。知識だけでなく、課題解決力も今後の日本史学習で身につけるべき能力であるというメッセージであろう。問5は、天皇の肖像画のイメージから、どのような天皇像を描こうとしているかを読み取る学習活動を想定したもので、これも資料を日本史学習でいかに活用すべきかを示す出題であった。ただ、**ア**については、その場で「密教法具を持つ」ことなどを読み取るのは難しく、後醍醐天皇の肖像について事前に知っていなければ解答は難しいだろう。密教法具を持つ部分を拡大し、これが密教法具であることを他の絵画などの資料から判断して解答するような設問であれば、受験者の資料読解力を問う設問になった。問6は紙幣の肖像に関する出題。Yは日本史の知識がなくても解答可能だが、Xは、平安時代以前に実在した人物の初登場がいずれも戦前であることに気付かなければ解答が難しい。

第2問はAが奈良、Bが京都の寺院に関する会話文をリード文としている。問1はいずれも文化財の写真に関する設問であるが、**ア**・**イ**ともに作品名などを直接問うのではなく、表面的な用語の暗記学習では得点できないように工夫されている。問2は行基に関する正誤問題であるが、誤文の④も行基の活動時期に近い内容であり、難しい設問であった。問3は史料の年代配列で、藤原宮、山背国、紫香楽宮の語句を拾い読みすれば解答可能であるため、ヒントになる単語がなく内容を理解できなければ判断ができないような史料が含まれていると良かった。問4は、Xの判別には史料中の「海外」が唐であることの知識が必要であるものの、高校段階の日本史学習の知識として

は初歩的である。Yは特に知識を要しないが、史料読解ができなければ解答できない。Xで求める知識がもう少し高度であると、高校での日本史学習で身につけた知識と史料読解能力の両方を問える設問になったであろう。問5は古代の寺院や仏教に関する知識を問う設問で、標準的な難易度である。

第3問は中世の人々の暮らしと考え方に関する研究発表についての会話文をリード文とする。問1は日本史で学習する柁の名称の区別と、度会家行の思想の内容を問うもので基本的な内容である。ただ、**イ**は「神本」という文言から「神が主」であることを推測しやすくしてしまっていたであろう。問2は延久の荘園整理令に関する正誤問題で基本的な内容である。問3は土地政策・税制の年代配列問題で、具体的な用語をなるべく避けた記述を工夫しており、難度は上がっているが良問である。問4は、まさにリード文にある「中世の人々の考え方って不思議」ということがよく伝わる、非常に興味深い題材を扱った設問であった。(1)は史料が現代語の大意ではあるが、聞きなれない単語が多く出てくるため、意味を正確に理解することは難しく、解答に苦勞した受験者もいたであろう。また、「公田」や「名」の意味がわからないと理解し難い文章でもあるため、高校での日本史学習で一定の知識を獲得していることが求められる設問であったと言える。(2)のXは、問4のまとめとしては良い文章であるが、Yが史料の内容とあまり関係がなく、やや唐突な印象を受ける。史料に書かれている部分と関連させながら、日本史の知識を問う文章になっていればバランスが良かった。たとえば「荘園領主」「東寺」「東寺百合文書」などの語句に関する知識を問う文章でもよかつたのではないか。

第4問は江戸時代の文芸や演劇と歴史的な出来事との関連をテーマとする発表のメモと会話文がリード文に用いられている。問1は江戸時代に関して幅広い時期・分野の知識を問う正誤問題で、標準的な難易度である。問2はYが文化史に関する理解を問う良問であった。文化史を理解することを目指す学習指導を心掛けることが求められている。問3は江戸時代の対外政策に関連する基本事項の年代配列問題で、分野・時期ともに限定的であり易しい。問4は**ア**が第2問の問1と同様に、文化史の用語についての説明文が空欄になる形式で、歴史用語について他の人に説明できるように理解することが求められている。**イ**は文化史を政治史と関連づけて時期を意識した学習が求められる設問であった。問5はaが史料2の末尾をもとに作った文章と考えられるが、意味のわかる単語だけを拾い読みするような方法で正答にたどりつくことは難しかったであろう。

第5問は「日本史A」との共通問題。パスポートの歴史に関する博物館の展示解説をリード文とする大問で、解説文Aは日本初のパスポート(旅券)、Bは明治中期の「旅券」に関する文章である。問1は江戸時代の人物に関する基本的な内容を問う設問で易しい。問2はⅡの時期を特定するのが難しかったであろう。それでも、日本郵船会社が欧米への航路を開設した時期だけでなく、「海運奨励策」に言及があることから、航海奨励法を想起できれば時期の特定は可能である。Ⅲは明治十四年の政変につながる事件の文であるため、日本郵船会社の設立(三菱と共同運輸会社の合併)の時期がそれよりも後であることが理解できているかを問う意図であったと考えられる。難度は高いが、適切な出題である。問3のXは日本史の知識がなくても判断できるが、Yは外交に関する史料から憲法に関する知識へと発展させており、史料から読み取れる情報が多岐にわたることを受験者に意識させる設問であった。問4はa・bが史料の意味を理解できなければ判断できない文で、この設問も語句の拾い読みでは解答できないように工夫されている。

第6問は「日本史A」との共通問題。日本の漁業と対外関係について述べたリード文で、Aは明治以降の漁場拡大と紛争について、Bは戦後の漁業について扱っている。問1は史料の内容に基づいたグラフの読み取り問題で、複数の種類の資料を活用した思考が求められる良問である。ただし、①と③は史料の内容に基づく文であるが、②と④は日本史の知識を問う文であり、正文の組合せ形式

による出題も考えられる。問2は同時期に属する文化と社会に関する文を組み合わせさせて選ばせる設問である。文化史を他分野と関連させることや、時期を意識した学習が求められている。問3は大正～昭和期の日米関係に関する年代配列問題で、Ⅱが意味するところを判断するのがやや難しかったと考えられる。しかし、Ⅰ～Ⅲはいずれも高校日本史では基本的な事項だと言える。問4はc・dが史料の内容に関する文で、他の史料問題と同様に、主語が何（誰）であるか、といったことを意識して意味を正確に把握しなければ判断できない良問である。問5はどちらの空欄も初歩的な事項であり、非常に易しい。少なくとも、正答の「中華民国」に対して誤った語句として「中華人民共和国」を挙げたり、正答の「佐藤栄作」に対して誤った語句として「田中角栄」を挙げたり、といった水準の出題は求めたいところである。問6は高度経済成長と公害に関する文の正誤判断で、Xは太平洋ベルト地帯を学習していれば判断は易しいが、やはり単純に用語を問うことを避けようとする出題姿勢を見て取ることができる。Yは公害の原因を問う文で、標準的な水準である。問7は魚介類の消費量と自給率に関するグラフについて、日本史の知識を背景に読み取る設問であった。いずれの選択肢も、歴史用語をできるだけ用いないようにしつつ、日本史学習の成果を引き出せるかを問うように工夫して作られている。また、③は円高・円安と貿易の関係を理解していることが求められる文で、歴史用語を単純に暗記しただけでは対応できない。④はインスタント食品の登場時期に関する文で、1990年代も教科書でしか知らない世代の受験者にとっては難しかったであろう。

3 ま と め

共通テストは実施3年目となり、出題の特徴もある程度見えてきた。多くの高校では令和5年度から日本史探究の授業が始まるであろうが、これまでの出題から、今後どのような学習活動でどのような力を身につけさせるべきか、ということについて、共通テストの作問姿勢は一つの指針となるものである。「探究」という言葉が一人歩きし、知識を軽視する風潮が生じるようなことがあってはならないが、知識を得ることだけを目的化したような学習も避けなければならない。今後も、学習で得た知識や資料を活用する技術を組み合わせたり、応用することを求めたりするような出題を継続されるようお願いする。

「日本史A」は、衛生・医療や海外渡航（パスポート）、漁業、女性の社会的地位の向上といった今日における社会的課題に関わる出題も多く、公民分野である「現代社会」との関連を想起させる。こうした傾向のもと、各問のメッセージ性が受験者の関心をどれほど喚起し、試験に意欲的に取組ませることにつながったか、興味深い。史資料については、政府や植民地統治機関などの公的文書・法令・統計が多く、新聞記事、論考、請願、日記も取り上げられた。的確かつ良質でわかりやすいものがよく精選されており、出題への工夫が感じられる。しかし、文面・グラフを読み取る史資料が大半で、写真・絵・図など視覚的な史資料がほぼなく、図版を活用した日ごろの指導・学習を踏まえた出題資料のバランス調整が必要である。また、おおむね平易な問題であり、受験者も取り組みやすい難易度であったと思われるが、教材や日常の学習指導にあたって取り扱いに差異が生じると想定される事項の出題についてはいっそうの吟味をお願いする。

「日本史B」は、分野のバランスが良い出題で、難易度も全体的には標準的であったと評価できる。一方で、旧石器～古墳時代の出題が全くなかった点は改善をお願いする。昨年度に問題点として指摘した、社会経済分野への偏りが解消された点は高く評価できる。また、知識を全く求められない、日本史を全く学習していなくても解答可能な設問も今年度はほぼ見られなかった。この点も昨年度と比べ改善されているが、日本史の知識をほとんど要しない設問もあり、この点は引き続き改善にむけた検討をお願いする。令和7年度から実施される「日本史探究」の共通テストにおいても、着実な学習の成果が得点につながるような作問を期待する。